

欧米における  
図書館学と図書館情報学の概念

—エスタブルーク (L.S. Estabrook)、  
ベイツ (M.J. Bates)、  
オーダンソン (R. Audunson)、  
マイバーグ (S. Myburgh)、  
タマロ (A.M. Tammaro)  
の理解を中心に—

山 本 貴 子  
大 城 善 盛

1. はじめに	3
2. エスタブルーク (L.S. Estabrook) の理解する 図書館学と図書館情報学	5
3. ベイツ (M.J. Bates) の理解する図書館学と 図書館情報学	19
4. オーダンソン (R. Audunson) の理解する 図書館学と図書館情報学	26
5. マイバーグ (S. Myburgh) とタマロ (A.M. Tammaro) の理解する図書館学 (librarianship) と図書館情報学	36
6. 結び	51

## 1. はじめに

2008年に図書館法が改正され、従来司書講習を準用してきた短期大学や4年制大学の司書課程の法的位置付けが変わった。その影響を受けてと推測されるが、司書課程を図書館情報学課程、また司書課程と司書教諭課程を合体させて図書館情報学課程と称する大学が出現してきている。今後の司書課程の在り方を研究している川崎らは、大卒は新たな図書館法施行規則に則りつつも、2014年度以降はそれぞれの大学の個性に見合った図書館情報学教育が求められている、と論じている<sup>3)</sup>。いずれも2008年の図書館法の改正を契機に司書課程を刷新したいという姿勢の表れだと推測されるが、司書課程と図書館情報学課程とはどう異なるだろうか。また、図書館学と図書館情報学とはどうであろうか。

日本図書館情報学会の『図書館情報学用語辞典』（第4版）は、図書館情報学を次のように定義している<sup>4)</sup>。

図書館学に情報学が付け加わった研究領域。図書館学が中心とする図書館にかかわる諸現象、具体的には、制度、運営、書誌コントロール、資料、サービス、利用、それに施設などに加えて、情報やメディアの性質、それらの生産から蓄積、検索、利用までの過程を対象とする。実際には、アメリカの library school が、コンピュータの利用や情報検索などをカリキュラムに取り入れ、school of library and information science と名称変更し始めた1960年代初めに起こり、*Encyclopedia of Library and Information Science* (1968-) や *Library & Information Science Abstracts* (1969-) が刊行された1960年代末に確立したと考え

#### 4 欧米における図書館学と図書館情報学の概念（山本・大城）

られる。日本では、「情報図書館学」、「図書館・情報学」などの表記があるが、「図書館情報学」が定着した。

上記のように、日本の「図書館情報学」の概念はアメリカの影響を受けているようであるが、アメリカでは2010年刊の『図書館情報学事典』(*Encyclopedia of Library and Information Sciences*) (第3版) 中の項目「library and information science」を、イリノイ大学の大学院図書館情報学部 (Graduate School of Library and Information Science, University of Illinois at Urbana-Champaign) の学部長の経験もあるエスタブルーク (L.S. Estabrook) が担当し、図書館情報学の定義や図書館学や情報学との関連等を記している<sup>5)</sup>。また、『図書館情報学事典』の責任編集者であるカリフォルニア大学ロサンゼルス校の情報学科 (Department of Information Studies of Univ. of California, Los Angeles) の教授であるベイツ (M.J. Bates) は、2015年に論文「The Information Professions: Knowledge, Memory, Heritage」を発表し、図書館学や情報学等について論じている<sup>6)</sup>。本稿では、アメリカにおける図書館情報学 (library and information science) の標準的な解釈の1つをエスタブルークとベイツの2人として理解し、それらを以下で紹介し考察する。

また、ヨーロッパでは、当時 (2007年) ヨーロッパ図書館情報教育研究協会 (European Association for Library and Information Education and Research) の会長を務めていた、オスロ大学のジャーナリズム・図書館情報学部 (Faculty of Journalism, Library and Information Science of Oslo Univ.) の教授オーダンソン (R. Audunson) が論文「Library and Information Science Education - Discipline Profession, Vocation?」を発表し、ヨーロッパの図書館情報学教育の状況や図書館情報学に関して論じている<sup>7)</sup>。図書館情報学教育の領域でボローニャ・プロセス (Bologna Process) 計画の一環として2005年

に「ヨーロッパにおける図書館情報学教育カリキュラムに関する熟考」(European Curriculum Reflections on Library and Information Science Education) プロジェクトがあり、その中心人物の1人がイタリアのパルマ大学 (Univ. of Parma) の図書館学教授タマロ (A.M. Tammaro) である。タマロは2012年刊の『ヨーロッパにおける図書館情報学の傾向と研究』(*Library and Information Science Trends and Research: Europe*) の中にマイバーグ (S. Myburgh) との共著論文「Education for Digital Librarians: Some European Observations」を掲載し、デジタル図書館員の養成に関して論じている。その論文の中にはヨーロッパ的な図書館学や図書館情報学の考え方も見出される。ヨーロッパにおける図書館情報学の標準的な解釈の1つをオーダンソン、タマロ、マイバーグとして理解し、それらを考察する。

## 2. エスタブルーク (L.S. Estabrook) の理解する図書館学と図書館情報学

### 2.1 エスタブルークの図書館情報学の定義

(エスタブルークは、『図書館情報学事典』の中の項目「library and information science」で、library and information science を次のように定義している。)

図書館情報学 (library and information science) は、あらゆる形の情報の創造、管理、利用に関わる学際的 (interdisciplinary) な研究領域である。(大学の) 学部や大学院のレベルで教授され、産業界や大学で研究の対象となっている領域である。図書館情報学では様々な理論を採用する。図書館情報学は情報の表示 (文明の記録された証拠) に焦点を当てる。同時に、情報がアクセス可能になるための技術や組織にも焦点が当

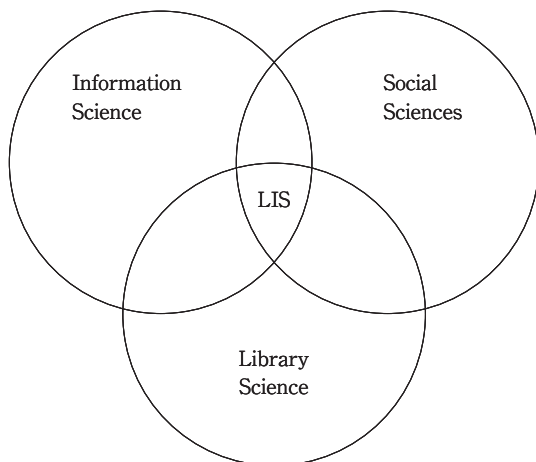


図1：図書館情報学（LIS）の領域

てられる。研究対象としての図書館情報学は1960年代末もしくは1970年代初期に始まった。しかし、そのルーツは19世紀にまで遡る。図書館情報学は、図書館学（library science）と情報科学（information science）とコミュニケーション学（communications）の交差した領域である。それは、図1のように表すことができる。

図書館学は資料群（コレクション）を組織化し、アクセス可能とする際に発生する問題を解決しようとする学問である。情報学は情報自体を理解し、その管理法を理解しようとする学問である。コミュニケーション学は、常に図書館学と情報学の1側面であったが、図書館学と情報学が成熟し互いに交差するようになって、2つの領域と混交するようになった学問である。（注：図1では communications の代わりに social sciences が使われている。）

図書館情報学は、「利用者中心」（user-focused）という特徴を持っている。

情報メディア（データ、レポート、図書、ビデオ、博物館資料等）だけに焦点を当てるのではなく、それらに記録された知識（内容）を必要とする人々へアクセスおよび入手可能とするような、社会的、技術的システムにも焦点を当てる。それらのシステムは、分類や目録作成からコレクションの構築および管理、特許取得、知的財産権にまで及ぶ。さらに、図書館情報学では索引、引用、その他の書誌情報の利用が、学問間の関連、学術ネットワーク、意思決定における情報の価値、等にどのような影響を及ぼしているか、も研究の対象とする。情報を入手・利用可能にする組織（図書館、文書館、博物館）の構造の研究も図書館情報学の領域である。ビジネスや組織の中の情報資源管理等のシステムも図書館情報学の領域である。

## 2. 2 エスタブルークの理解する図書館情報学の歴史

### 2. 2. 1 図書館情報学の基盤構築時代（1880-1960年代）

上記のように、エスタブルークは、図書館情報学は図書館学、情報学、およびコミュニケーション学の交差した領域であり、その研究領域は1960年代末もしくは1970年代初期に始まった、と理解する。そして、それまでは互いに交差しながらも、図書館学、情報学、およびコミュニケーション学は独自の道を歩んできたと見なし、1880-1960年を図書館情報学の基盤構築の時期と捉えて、その期間の図書館学、情報学、およびコミュニケーション学の特徴を以下のように記している。

#### 2. 2. 1. 1 1880-1960年代の図書館学

図書館学は、1887年に、徒弟制度による教育から高等教育機関の中における学術（academic）領域に入った。19世紀のアメリカにおいては、そのような移行は職務のコンピテンシー（能力）が上昇した時に取られた常套手段で

あった。図書館学の領域では、デューイ (M. Dewey) が1887年にコロンビア大学 (Columbia Univ.) にライブラリー・スクール (School of Library Economy) を創設した。

初期の図書館学は図書および図書館の歴史と書誌に焦点を当てた。この領域は、多くの国で現在でも図書館学の最重要領域になっている。学術 (academic field) としての図書館学は、カーネギー財団 (Carnegie Corporation) の支援によって1923年に調査・刊行されたウィリアムソン (C.C. Williamson) の『図書館サービスのための教育』 (*Training for Library Service*)<sup>9)</sup> によって大きく飛躍し、成熟した。

1926年には、カーネギー財団はシカゴ大学 (Univ. of Chicago) の大学院図書館学部 (Graduate Library School) 創設に財政的支援を行った。同図書館学部は図書館学で最初に博士号を授与する学部となり、1930年代における図書館学の発展に大きく貢献した。図書館学はより学際的になり、実質的な研究が行われ、理論も深められていった。同図書館学部の教授、特にバター (P. Butler)、ウェイプルス (D. Waples)、ベレルソン (B. Barelson) の3人は、図書館の研究に社会学や行動科学の様々な手法を適用した。彼らの見解は、それぞれその後の図書館学の発展に大きく貢献した。公共図書館調査の一環として、ベレルソンが主体となって1949年に刊行された『図書館の公衆』 (*The Library's Public*)<sup>10)</sup> は、その後の図書館学、特に公共図書館の領域に大きな影響を及ぼした。同図書館学部の卒業生であるシェラ (J. Shera) とイーガン (M. Eagan) は、図書館学の1分野である書誌とコミュニケーション学を関連付けるのに大きな役割を果たした。1952年の論文「書誌理論の基礎」 (*Foundations of a Theory of Bibliography*)<sup>11)</sup> で、彼らは、書誌は社会的目的を持っていると論じた。書誌は一部の利用者のために存在するのではなく社会的目的を持っている、書誌は文字によるコミュニケーションが社会を通



じて行われ、社会形成に貢献する方法（手段）であると論じた。そして、彼らは、その研究法を社会認識論（social epistemology）と呼んだ。

### 2. 2. 1. 2 1880-1960年代の情報学

情報学という学問は、情報自体とその表示に関する学問である。すなわち、①情報とは何か、②如何に表示するか、③その機能を如何に理解するか、④如何に利用されるか、⑤情報を組織化、分類、検索するためのシステムを如何に設計するか、を研究する学問である。

情報学の歴史は、①コンピュータ技術の発達、②数学の理論や情報を計る理論の発達、③研究や学問のための情報検索システムの構築、を含んでいる。情報学は、オトレ（P. Otlet）とラ・フォンテーヌ（H. La Fontaine）のドキュメンテーション活動、すなわち1895年の国際書誌協会（Institut International de Bibliographie）の設立に端を発している。彼らは1905年に国際十進分類法を作成している。

アメリカでは、1937年にデービス（W. Davis）によってアメリカ・ドキュメンテーション協会（American Documentation Institute, 以下 ADI）が設立された。ADI は設立当初、マイクロフォーム技術に関心を持っていたが、間もなく会員に情報管理に関心を持つ政府、専門職協会、財団からの代表が増えるようになって会員間の協働が盛んになり、研究にスポンサーが付くようになった。1952年には ADI は個人会員を認める専門職協会になった。

ドキュメンテーション領域の多くの研究者は、科学と産業の経歴を持っていた。そして、間もなく莫大なデータや情報資源の管理問題の解決に関わっていった。多くの場合、それは政府が抱えている問題であった。第2次世界大戦の戦中および戦後に膨大な科学出版物が刊行され、その管理問題がドキュメンテーション領域の研究者の主要な関心事になった。そして、軍事産業

が、それらの情報の蓄積と検索システムの開発のために莫大な資金援助を行うようになった。

第2次世界大戦後、ドキュメンテーション（情報学）の発展に貢献した人物が2人いる。その1人はブッシュ（V. Bush）で、彼の論文「考えるままに」<sup>12)</sup>（As We May Think）はあまりにも有名である。彼はマイクロフォーム技術を使って人間の知識を容易に広くアクセス可能にすることを研究し、現在のWebのオリジナルな発案者ということになっている。しかし、その源はオトレにあった。もう1人はシャノン（C. Shannon）である。彼の「コミュニケーションの数学的理論」<sup>13)</sup>（A Mathematical Theory of Communication）は、情報を数量化し、情報の領域を理解するのに貢献した。コミュニケーション研究者のウィーヴァー（W. Weaver）と共著で著した先の論文と同じタイトルの本『コミュニケーションの数学的理論』<sup>14)</sup>（*A Mathematical Theory of Communication*）は、社会科学分野のコミュニケーション学において研究の基盤になった。

### 2. 2. 1. 3 1880-1960年代のコミュニケーション学

歴史、文化、および情報の伝達のツールであるリテラシー、図書の歴史、および読書は、常に図書館と複雑に結びついている。アメリカのライブラリアンは、19世紀末までには資料の保存だけでなく、利用者とコミュニケーションするための自分たちの役割について考察していた。例えば、1876年のALA大会において、公共図書館長グリーン（S. Green）は、「民衆図書館におけるライブラリアンと利用者との個人的な交流や関連を持つことの是非」（The Desirableness of Establishing Personal Intercourse and Relations between Librarian and Reader in Popular Libraries）を発表している。1910年には、ライブラリアンは利用者が読んでいる図書の種類を研究している。そのような

研究は間もなくアメリカと西欧で一般的になった。

歴史的に見ると、図書館学やドキュメンテーションの研究者たちは、自分たちの領域がコミュニケーション学と関連していると考えていた。しかし、コミュニケーション学が成熟するには1940年代まで待たねばならなかった。コミュニケーション学の歴史家は、1930年代と1940年代にシカゴ大学のウェイブルズが行った読書研究がコミュニケーション学の進展へ大きく貢献したことを指摘する。また、図書館学の研究者はマスメディアの自分たちの領域への影響にも関心を持っていた。上述の公共図書館調査の一環として1949年に刊行された『マスメディアの影響』<sup>15)</sup> (*The Effects of the Mass Media*) は、大衆の趣味とその読書への影響、さらに図書館との関連を論じた。

1955年には、ウェスタン・リザーブ大学 (Western Reserve Univ.) にドキュメンテーション・コミュニケーション研究センター (Center for Documentation and Communication Research) が設立された。設立の目的はドキュメンテーションとコミュニケーション学の領域を結びつけることであった。センターの副所長はケント (A. Kent) で、彼は情報検索の種々の実験を行った。間もなく彼はピッツバーグ大学 (Univ. of Pittsburgh) に招聘され、1970年に同大学で情報学科 (Dept. of Information Science) を設立した。

### 2.3 エスタブルークの理解する図書館情報学の出現と現状

情報管理やアクセスの複雑化が進んだのは、技術が急速に進歩している時期であった。1960年代におけるマクルーハン (M. McLuhan) の『グーテンベルクの銀河系』<sup>16)</sup> (*The Gutenberg Galaxy*) とマツハルプ (F. Machlup) の『アメリカにおける知識の生産と流通』<sup>17)</sup> (*The Production and Distribution of Knowledge in the United States*) の刊行は、社会における情報の重要性を人々に認識させた。データを利用可能にするための分類および組織化の問題、検

素ツールの設計および作成が、図書館学と関連のない研究者の関心事となっていた。

そのような図書館学への潜在的挑戦に対するアメリカと西欧における図書館学部の反応が、図書館情報学の出現のきっかけになった。上記のような状況下で、1961年にイリノイ大学 (Univ. of Illinois) が図書館研究センター (Library Research Center) を、1964年にカリフォルニア大学バークレー校 (Univ. of California, Berkeley) が図書館研究所 (Institute of Library Research) を設立した。イギリスでは、1976年にシェフィールド大学大学院図書館学・情報学部 (Postgraduate School of Librarianship and Information Studies, Univ. of Sheffield) の中に利用者研究センター (Centre for Research in User Studies) が設立された。すなわち、1960年代にそれ以前とは性格を異にする図書館学研究が出現した。それは図書館情報学の萌芽であった。

また、1960年代になると、図書館情報学と呼べる領域での研究や博士課程学生への政府の助成が膨大に増えた。10年も経たないうちに博士号を保持する図書館学部の教授陣は増大し、それら教授陣は熱心に研究に取り組んだ。さらに、政府、ビジネス界、産業界の有名な情報科学者が図書館学部の教授陣に加わるようになった。上記のケントをはじめ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のヘイズ (R. Hayes)、シラキュース大学 (Syracuse Univ.) のコクレイン (P. Cockrane)、イリノイ大学のランカスター (F.W. Lancaster) が良い例である。

また、学問間を横断した教育方法も図書館情報学の深化に貢献した。例えば、スタンフォード大学 (Stanford Univ.) のコミュニケーション学の教授ペイスリー (W. Paisley) はカリフォルニア大学バークレー校の図書館学部で教えたし、シラキュース大学の情報学部 (School of Information Studies) 博士課程の学生はコーネル大学 (Cornell Univ.) のコンピュータ科学者サルト

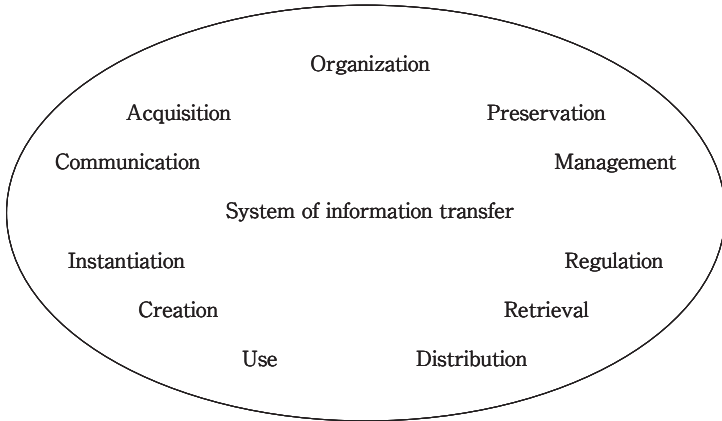


図2：情報伝達サイクル (information transfer cycle)

ン (G. Salton) の授業を受けることが許可された。

しかし、21世紀現在、図書館情報学に最大の影響を及ぼしたのは図書館学のカリキュラムに情報学を追加したことではない。最大の影響（要因）は、図書館情報学の焦点が図書館や学術コミュニケーションから「情報」(information) へ移ったことである。研究は情報検索からレファレンスの正確性まで多岐にわたるようになった。1970年代を通じて、多くの図書館学部 (library school) が名称に「情報」(information) を加え、カリキュラムを拡大した。ADI は1968年にアメリカ情報学会 (American Society for Information Science) に名称を変更した。1970年に設置された「図書館と情報学に関する国家委員会」(National Commission for Library and Information Science) は、連邦政府から図書館学と情報学の2領域の調査研究と方針策定の責務を負わされた。

1972年にシラキュース大学の情報学部長になったテーラー (R.S. Taylor) は、図2のような情報伝達サイクル (information transfer cycle) モデルを提

唱した。

そのモデルは、図書館情報学が、記録された知識を最終的にアクセスし入手可能とさせるすべてのプロセスおよび機関と関わることを示している。モデルは、図書館情報学のパラダイムを図書館中心から情報伝達サイクルへ変化させた。またモデルは、学術出版物やそれ以外の情報資源だけでなく、情報の蓄積と検索、流通の媒体としての図書館を含んでいる。情報伝達は、著作権法や検閲を含む社会政策、図書館の建築法や Web のデザイン法によっても左右される。さらに、電子情報源の場合はフォーマットやコード化の方法も伝達のスピードや正確性に影響を与える。このテーラーのモデルは、直ちに図書館情報学界で受け入れられた訳ではなく、また、現在でもすべての図書館情報学部が受け入れている訳ではない。しかし、学問領域としての図書館情報学の1つの代表的なパラダイムである。

上記のようにパラダイムが変化する中で、「情報の利用と利用者」が図書館情報学の中心課題となった。そのため、上記のペイスリーやダーヴィン (B. Dervin) のようなコミュニケーション学者の研究が図書館情報学の研究に益々重要になった。1986年のダーヴィンとナイラン (M. Nilan) の論文「情報ニーズと利用」(Information needs and uses)<sup>18)</sup>は、図書館情報学領域の研究者が研究課題を「情報ニーズ」、「情報探索」、「情報利用」へシフトさせていることを指摘している。このような理論に基づく研究が盛んになるにつれて、研究者の間で学際的な研究が深まっていった。理論自体が学際である情報行動の研究成果に目を見張るものがあつた。具体例は、ウィルソン (T.D. Wilson) の「情報行動モデル」(models of information behavior)<sup>19)</sup>、ダーヴィンの「意味付与理論」(sense-making theory)<sup>20)</sup>、クールソ (C. Kuhlthau) の「情報サーチ・プロセス」(information search process)<sup>21)</sup>である。

図書館情報学の研究や教育が図書館から情報へシフトしたからといって、

図書館を除いた訳ではない。図書館情報学は、図書館学の研究と実践から生まれた目録作成、分類、蔵書構築を基礎にしている。有形もしくは無形の図書館は、あらゆる形態に含まれている情報の極めて重要なリポジトリーである。しかし、1970年代におけるパラダイム・シフトは図書館学と情報学の積年の緊張関係をさらに高めた。ライブラリアンの存在価値は、知的自由へのコミットメント、検閲への反対、情報への公平なアクセス、を謳う倫理綱領である。それに対して、ビジネスと産業にルーツを持つ情報学は、そのようなコミットメントを持たない。パラダイムから図書館と専門職規範を外すことによって、図書館情報学は上記の倫理綱領を捨てたのではないかと憂慮するライブラリアンも存在する。特に現在関心を持たれているテーマとしては、図書館情報学（教育）は図書館での実践ができるように適切に学生を教育しているかどうか、である。

図書館情報学の教育者は、歴史的に図書館における専門職の実践を分析し、その改善・進展を図ってきた。このことは現在でも変わっていない。情報検索、人間とコンピュータとの相互作用、それと類似の研究の成果が、日常の図書館実践の中では見えないだけである。しかし、ライブラリアンに見える重要な研究成果もあり、上記のクルソの研究、ダーヴィンとデュードニー (P. Dewdney) の研究<sup>22)</sup>、デュランス (J. Durrance) のコミュニティにおける情報ニーズの研究<sup>23)</sup>、グリフィス (J.-M. Griffiths) とキング (D.W. King) による公共図書館への投資価値の研究<sup>24)</sup>、がその具体例である。インターネットの発達やデジタル・コレクションの増大は、図書館情報学にとって図書館が益々重要であることを示している。インターネットとデジタル・コレクションは、図書館情報学以外の学問分野にとっても魅力的なものになってきている。1996年にアメリカ国立科学財団 (National Science Foundation、以下 NSF) は「デジタル図書館プロジェクト」(digital library initiative) に4年間

助成した。その目的は、デジタル形式で情報を収集、保存、組織化する手段の開発、およびコミュニケーション・ネットワークを介してユーザーフレンドリー（user-friendly）で探索、入手、処理することができる手段の開発にあった。現在まで8年間も続いており、それは図書館情報学における研究を促進させ、図書館情報学を学問として安定させている。そして、図書館情報学部以外との協働を奨励している。

1960-70年代における連邦政府の助成がアメリカにおける図書館情報学のパラダイム・シフトを助けた。1990年代およびそれ以後の連邦政府の助成が、図書館情報学の領域の拡大に貢献し、また他の学問が図書館情報学の課題に取り組む刺激になった。図書館情報学が直面している課題を、1988年刊のアボット（A.D. Abbott）の『専門職のシステム』<sup>25)</sup>（*The System of Professions*）が社会学的に描いている。

2005年に図書館情報学、情報学、コンピュータ科学、コミュニケーション学、公共政策領域の専門家が集まって、ischoolsを設立した。ischoolsは情報を学問の核とし、技術、情報、人が交差する領域の専門職員を育成しようとしている。その集団が図書館情報学の今後にどのような影響を与えるかは、今のところ明らかではない。

「図書館情報学とは何か」ということに関して、以前から多くの研究者が議論してきている。上記の解釈が1つの理解法である。図書館情報学は現在、進展している情報の組織や利用の研究へと拡大している。拡大してきている領域として、医療情報学（medical informatics）、コミュニティ情報学（community informatics）等の特定領域への情報学の応用がある。「informatics」とは、特定領域における情報技術の設計、応用、および利用の研究を指す。他の領域としてデータ・キュレーション（data curation）と利用がある。データ・キュレーションとは、デジタル・データの創造、管理、保存という



一連の情報伝達サイクルの中での情報の管理のことである。それは領域としては新しいが、図書館学で従来行われてきたアプローチでもある。情報検索の研究者は現在、デジタル人文学（digital humanities）の課題に取り組んでいる。それは、オントロジー（ontology）やテキスト検索という新しい課題を突き付けている。

## 2.4 考察

以上が、エスタブルークの理解するアメリカを中心とした図書館情報学であり、その歴史である。図書館情報学が比較的新しい学問であり、そして情報技術が日々変化している中で、「図書館情報学とは何か？」に対して明確な答えを出すことは難しい。そのような状況の中で、上記のエスタブルークの図書館情報学は1つの解釈であり、標準的なものの1つとして理解することができる。エスタブルークは図書館情報学を歴史的な視点から図書館学、情報学、コミュニケーション学との関連も論じているので説得力がある。エスタブルークは、テーラーの「情報伝達サイクル」モデルを利用して、（それ以前の）図書館学が研究の主対象を図書館に置いていたのに対し、図書館情報学は情報伝達サイクルを研究対象にしているとし、両者のパラダイムの相違を指摘している。

エスタブルークは、1996年のNSFの「デジタル図書館プロジェクト」への助成により、デジタル形式で情報を収集、保存、組織化する手段の開発、およびコミュニケーション・ネットワークを介してユーザーフレンドリーで探索、入手、処理する手段の開発を目指すようになり、それは図書館情報学における研究を促進させ、図書館情報学を学問として安定させていると記している。他方で、「情報伝達サイクル」は理論的枠組みとしての図書館情報学の1つの代表的なパラダイムであり、すべての図書館情報学部が受け入れ

ている訳ではないとも記している。これは図書館情報学のパラダイムが複数あることを示唆しており、彼は図書館情報学は学問としては未だ安定した状況にあるとは言えないと考えているようである。

また、エスタブルークは、1960-70年代における連邦政府の助成がアメリカにおける図書館情報学へのパラダイム・シフトを助け、1990年代およびそれ以後の連邦政府の助成が図書館情報学の領域の拡大に貢献し、他の学問が図書館情報学の課題に取り組む刺激になった、とも述べている。刺激の具体的な例の1つは、2005年に図書館情報学、情報学、コンピュータ科学、コミュニケーション学、公共政策領域の専門家が集まって ischools を設立したことである。エスタブルークは、ischools が図書館情報学の今後にどのような影響を与えるかは今のところ明らかでないと記しているが、*US News & World Report* の2013年の図書館情報学部のランキングで上位にランクされている殆どの図書館情報学部（LIS と呼ばれている学部）が ischools のメンバーになっているので、アメリカの図書館情報学は今後 ischools の影響を免れることはできないと思われる。

一方で、アメリカの図書館学や図書館情報学に関しては、バックランド（M. Buckland）の<sup>26)</sup>ように、エスタブルークとは大きく異なる理解の仕方をする研究者が存在することにも留意する必要がある。

エスタブルークの言説で他に気になるところは、医療情報学やコミュニティ情報学、さらにはデータ・キュレーションまでも図書館情報学の範疇に入れていることである。また、情報検索の研究者は現在、デジタル人文学（digital humanities）の課題に取り組んでおり、それはオントロジー（ontology）やテキスト検索という新しい課題を突き付けているとも記して、それも図書館情報学の範疇に入れている。エスタブルークは現在進展しているICTと関連付けての情報学の定義をしていないので、図書館情報学と情報

学の相違が明確でない。

コペンハーゲン大学人文科学部王立図書館情報学研究科 (Royal School of Library and Information Science, University of Copenhagen) の教授ヒオルランド (B. Hjørland) は2014年の文献で、国際的な視野からではあるが、図書館情報学と情報学の相違、さらに図書館学 (library science)、書誌学 (bibliography)、ドキュメンテーション (documentation)、情報技術 (information technology)、情報研究 (information studies)、情報管理 (information management)、知識管理 (knowledge management)、情報システム (information systems) 等の関係を簡潔に整理している<sup>27)</sup>。

なお、インディアナ大学 (Indiana Univ.) 情報図書館学科 (Dept. of Information and Library Science) のかつての図書館情報学部 (School of Library and Information Science) 時代に学部長の経験のあるクロニン (B. Cronin) らは、2012年に論文「A Bibliometric Chronicling of Library and Information Science's First Hundred Years」を発表した。その中でクロニンらは図書館情報学を図書館学と情報学の合体したものと理解している。そして、1900-2010年間に出了た160種の雑誌に載った96,000点の論文 (paper) を分析し、図書館情報学は、図書館職に焦点を当てた専門職領域から情報と利用に焦点を当てた学術 (academic) の領域に変化してきていると論じている<sup>28)</sup>。すなわち、クロニンらによると、図書館学や情報学は図書館情報学のサブ領域ということになる。

### 3. ベイツ (M.J. Bates) の理解する図書館学と図書館情報学

#### 3.1 ベイツの図書館学と図書館情報学

(ベイツは、2015年の論文「The Information Professions: Knowledge, Memory,

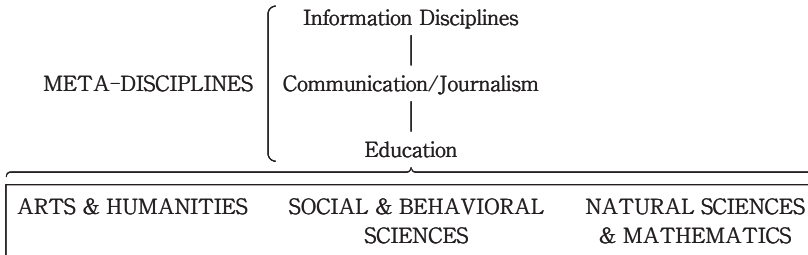


図 3：伝統的な学問領域とメタ学問領域<sup>29)</sup>

Heritage」の中で、図書館学・図書館情報学・情報学に関して次のように論じている。)

伝統的な学問領域を横断する学問群もある。それはメタ学問領域（meta discipline）と呼ばれるべき学問群で、図3のように表すことができる。情報関連の学問群（information disciplines）もその中に入る。

メタ学問領域のカテゴリーに入る学問群は特定の社会的目的から学問を組み立て、その特定の視点から伝統的な学問群と関わる。それらの学問群は伝統的な学問群と同様、知識と関わる。自分たちの役割や理論化を達成するために伝統的な学問群と関わる。例えば、教育家は教育と学習の理論と実践に関わっている。すなわち、すべての伝統的な学問領域において如何にしたら最高の学習が可能か、ということ課題にする。コミュニケーション学の研究者はメッセージの伝達や様々な文脈における影響に関して研究する。コミュニケーション学の実践者すなわちジャーナリストは、関心のあるトピックの選択法を学び、ニュースになるものを探し、物語を作成し提供する。情報関連の学問群では、情報の収集・組織化・提供の社会的目的が活動のすべてを形成する。教育学、コミュニケーション学、情報関連の学問群の3領域に

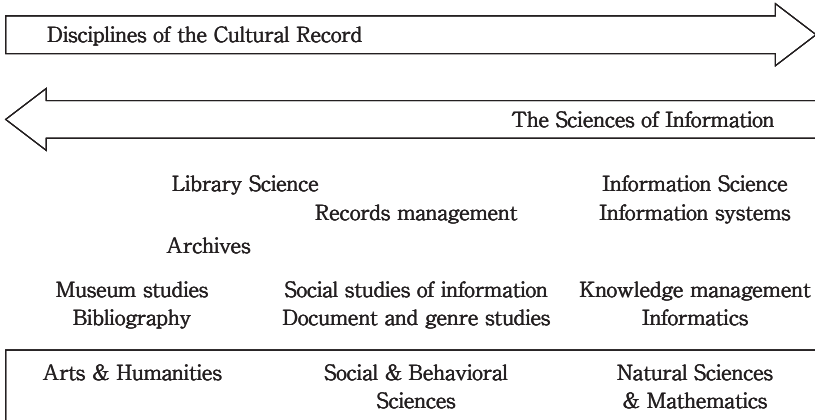


図4：情報関連学問のスペクトル<sup>30)</sup>

においては、様々な専門職実践の中で社会的目的達成のために伝統的な学問群の内容が再構築され、知識の操作や伝達が行われる。社会や他の研究者は情報関連の学問群をどのように位置付けるべきかを理解できず、軽蔑する傾向がある。社会や他の研究者は情報関連領域の専門職的目的の性格が変化してきているのを理解していない。社会や他の研究者は伝統的な学問群しか見ていないので、教育学の科目を「内容のないもの」(content-free)と軽視する傾向がある。情報関連の学問群についても同様のことを言われることがある。

情報関連の学問群をスペクトルにすると図4のようになる。芸術・人文学(arts & humanities)に近い領域を文化記録の学問群(disciplines of cultural record)、科学に近い領域を情報科学群(sciences of information)としている。そして、基盤には伝統的な芸術・人文学、社会・行動科学、自然科学・数学を据えてある。

なお、ベイツは、図4の中にリストされている11の学問群が『図書館情報

学事典』(第3版)に採用した学問群である、と記している。図には「図書館情報学」(library and information science)は出ていない。ベイツは、『図書館情報学事典』(第3版)を *Encyclopedia of Library and Information Sciences* と図書館情報学を複数形で表しているが、それは出版社の意向であり、実際は *Encyclopedia of Information Disciplines* の書名にしたかった、とも記している。また、「library and information science」は情報関連の学問群の同胞 (sibling) であるとも述べている。「library and information science」の用語はこの論文の中で複数回使われているが、「同胞」の意味する内容やその用語がどのような文脈で使われているのか、は不明である。図の中の各学問の位置付けに関しては、その起源が大きく影響しており、理論的に成熟していくと各学問 (の理論) は広い範囲に適応可能となる、とも記している。

さらに、情報関連の学問群について、ベイツは、サブ領域をスペクトルした場合や、当学問群のファセットを概念化した場合、さらには、さらに細分化された美術図書館学、企業オントロジー、医療情報学についてファセット化した場合などについても述べている。<sup>31)</sup>

学問 (discipline) と専門職 (profession) の関連について述べると、医師 (職)、会計士 (職)、臨床心理士 (職)、等も含めてすべての専門職は理論と実践の混合である。すべての専門職は一般的な理論体系の習得と理解を必要とする。専門職員は一連の現実世界の課題を解決するためにその理論体系を選択的に、かつ創造的に応用する。一般理論の応用は判断と経験を必要とする。このように、すべての専門職は理論、調査研究、実践ベースの原理、長い経験と長老の実践者の熟考から生まれる一般的な知識体系を有している。例えば、情報学分野では人の情報探索行動についての多くの研究成果を得て

おり、その研究成果は、人の情報探索行動は我々の洞察するものとは相反していることを教え、図書館におけるより良いレファレンス・サービスを可能にしてくれる。情報学分野の研究成果は、社会科学全般、特に社会学や心理学の進展に貢献している。このように、すべての専門職は学術的に価値のある知識を生産する性格を有し、各専門職領域で現実世界の問題解決を支援する。すべての専門職は学術的な側面と専門職的实践の側面を有している。そのため、部分的にはあるが、学問 (discipline) と専門職 (profession) は意味の上で重なる。

情報関連の専門職群は、歴史的に特定の保管機関の管理から始まった。初期には図書館、文書館、博物館が情報関連の専門職群の焦点であった。如何に情報資源を増加させるかが大きな課題であった19世紀においては、それらの物理的な機関が専門職化の焦点になったのは当然であった。図書館、文書館、および博物館は、19世紀末から20世紀初頭にかけて物理的に成長する必要があった。そのために、建築や情報資源の格納がそれらと関わる専門職の焦点となった。物理的な機関に焦点を当てた学問が図書館学 (library science)、文書館学 (archival science)、博物館学 (museum studies) となった。

図書館学の分野では、デューイ (M. Dewey) の活動と共に1870年代に専門職化が始まった。8,000冊の蔵書が次第に増加する大学図書館は教授の片手間で運営された。しかし、1万冊を超えると、1人や2人の教授の手探りのコレクション組織法では維持できなくなった。一貫した原理や実践法が開発されねばならなくなった。図書館経営のスキルや原理が、将来図書館員になる人を対象に教授されるようになった。コレクション規模の増大が図書館職の専門職化につながった、と理解することも可能である。同時期には膨大な情報資源を格納する図書館を建てるのが図書館専門職の注目の的であった。しかし、20世紀後半の終わり頃からオートメーションやデジタル保管が

増大するようになるにつれて、物理的な保管は重要性を減じている。図書館は情報の利用をより重要視するようになってきている。

情報保管へのコンピュータ応用が可能になるにつれて、情報専門職(員)の間で「情報 vs 図書館」の議論や対立が見られるようになった。しかし、「情報 vs 図書館」の対立は存在しないと理解する。すべての専門職が重要であり、価値がある。各専門職は特定の歴史的な文脈の中で発生してきていることを理解すべきである。19世紀に情報資源を物理的に保管する機関が必要になり、機関に基盤を置く専門職が出現した。それらの専門職では機関が組織化の原理になった。20世紀末から21世紀にかけての情報技術の進展によって、情報を統一した方法で見ることができるようになった。しかし、それは人の情報行動の深い理解、情報技術を応用した情報保管の様々な可能性の理解を必要としている。その可能性の理解は、特定の場所での保管とは無関係であることの理解を含む。

情報を分類すると、遺伝情報 (genetic information)、経験情報 (experienced information)、実行情報 (enacted information)、表現された情報 (expressed information)、組み込まれた情報 (embedded information)、記録情報 (recorded information)、残留情報 (trace information) の7種があり、組み込まれた情報と記録情報がグナティレイク (S. Goonatilake) の論じる体外情報 (exosomatic information) に当たる<sup>32)</sup>。多くの情報関連の学問群はすべての情報に関心を寄せているが、特に記録情報を研究対象とし、その移転過程 (information transfer) に関心を持っている。図書館情報学と文書館学は記録情報を対象にし、博物館学は組み込まれた情報を対象にしているが、3領域とも文化形態物 (cultural forms) を対象にしている点で類似している。それを図で表すと、図5のようになる。



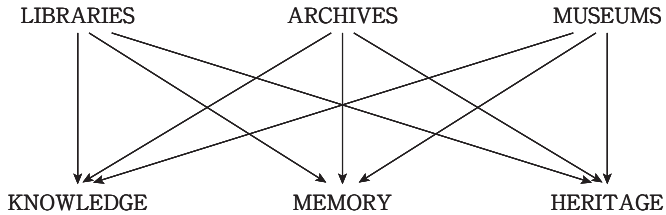


図5：図書館、文書館、博物館の関係<sup>33)</sup>

### 3.2 考察

ベイツは情報関連の学問群を理解するために、「メタ学問領域」の概念を使って図3のように表した。図書館学、図書館情報学、情報学は学際領域 (interdisciplinary) の学問だとよく言われるが、ベイツは、情報関連の学問群は生化学や地政学のような2学問間で使われる「学際領域」とは異なっており、「メタディシプリン」の概念が適当であると論じている。「メタディシプリン」は伝統的な学問群を基盤にした専門職的学問であり、社会的要請 (社会的目的) から出現している学問である、とベイツは論じる。極めて説得力のある言説である。また、図4も極めて説得力のある概念図である。

アメリカではライブラリアンという専門職の教育は大学院で行われているが、上記の図3の情報関連の学問群の位置付けにより、その根拠が鮮明になる。すなわち、ライブラリアン職は伝統的な学問群を修めていないと務まらない専門職であるということになる。(総体的には)ライブラリアン職は人文科学、社会科学、自然科学にわたるすべての伝統的な学問を修めていないと務まらない専門職であるが、個々のライブラリアン (職) は各自の得意とする伝統的な学問を修め、それに加えて図書館情報学特有の学問 (図書館、情報、利用者、およびそれら3者の関係を研究する学問領域) を修める、というこ

とを意味する。ライブラリアン職はどのレベル(職業養成機関、学部、大学院)で養成されるべきか、が国際的にも課題になっているが、ベイツの図3はそれに1つの模範的な解答を与えていると言える。

ベイツが図書館学をどう理解しているかは、図3や図4等である程度わかるが、図書館情報学をどう理解しているかは不明である。ベイツの論文で気になるところは、図4の情報関連の学問群の具体的な名称である。それらの学問群が、すべて学問として社会的に認められているかどうか、である。

また、ベイツは、情報保管へのコンピュータ応用が可能になるにつれて情報専門職(員)の間で「情報 vs 図書館」の議論や対立が見られるようになったが、その対立は存在しないと理解する、すべての専門職が重要であり価値があり、各専門職は特定の歴史的文脈の中で発生してきていることを理解すべきであると記しているが、そのような見方、理解の仕方は、現実社会を楽観的に見ていると言える。上記のアボット<sup>34)</sup>やオリヴァー<sup>35)</sup>(G. Oliver)も論じるように、類似の学問群、類似の専門職群は激しく管轄(領域)争いをしているのが、現実社会である。

#### 4. オーダンソン (R. Audunson) の理解する図書館学と図書館情報学

##### 4.1 オーダンソンの図書館学と図書館情報学

オーダンソンは2007年の論文「Library and Information Science Education - Discipline Profession, Vocation?」の中で次のように論じている。

学術領域 (academic field) としての図書館情報学 (library and information science) は、特にヨーロッパにおいてはパッチワークに似ている。ヨーロッ

パでは約30カ国がそれぞれ独立した形で図書館情報学を発達させている。アメリカ合衆国やカナダのような統一した認定団体はない。ヨーロッパでは、図書館情報学には職業的（vocational）、学問的（disciplinary）、専門職的（professional）アプローチがある。各アプローチの中では技術的、社会科学的、人文学的志向という相違も見られる。学問的アプローチと専門職的アプローチは研究基盤型で学術的である。ボローニャ・プロセス（Bologna Process）計画によって高等教育の統一化を図り、図書館情報学教育を学問的なものに変更しようとする動きがあるが<sup>36)</sup>、現在でもヨーロッパでは専門職学位（professional degree）を維持している。

ヨーロッパの状況を概括すると、次のようになる。

- 1) いくつかの国、特に英国では、図書館情報学の修士号は他の主題領域における学士号を基盤にしている。他方、デンマークやスウェーデンのような北欧諸国では、図書館情報学の博士号は図書館情報学の修士号、図書館情報学の修士号は図書館情報学の学士号を基盤にしている。
- 2) 図書館情報学は学際領域（multidisciplinary）の学問である。それは、数学や社会科学等の様々な主題知識を主な能力（competencies）とする専門職員も含んでいる。教育プログラムはそれらの主題を基盤に理論的、方法論的パースペクティヴを採用している。図書館情報学教育はいろいろな学部学科、例えば人文学部、社会学部、コンピュータ科学科の中に位置付けられ、そこで行われている。

国際的に見ると、図書館情報学教育は過去10年間に図書館職との関連を薄めようとしている。ゴーマン（M. Gorman）のように、図書館学は図書館情報学を通過して学問志向（discipline-oriented）の情報学へ傾斜し、現実の図書館界で必要とされている卒業生を送り出していない、と批判する人もいる。

そのような批判は重要であるが、必ずしも正鵠を射ていない。例えば、機関（図書館等）に基盤を置かない図書館情報学教育が、図書館で直ぐには役に立たないが、広い状況や図書館もそのサブ領域とする機関で通用する能力を持つ卒業生を送り出す場合があるだろう。

学問志向の図書館情報学に関連してまとめると、次のようになる。

- 1) 特定の学問は、他の学問から区別するために、教育や研究のコアなるものを同定しようとする。伝統的な図書館情報学のコアは、研究すべき主題（例：人間の情報検索）、情報検索システム、理論的アプローチ（例：認知的アプローチ）、方法論的アプローチ（例：グラウンデッド・セオリー、統計的手法、計量書誌学）から成るであろう。知識の組織化（目録作成、分類、検索）というテーマは成功し、図書館情報学のコアとして普及した。図書館情報学教育はそのコアに沿って計画され、その線に沿った教授も出現し、その線に沿った卒業生を送り出してきた。
- 2) 情報検索は、後に情報探索行動（information seeking behavior）によって補足された。情報探索行動は1980年代に次第に独立分野になった。情報探索行動は、機関やシステムの枠を超えて行動の1形態として研究されるようになった。情報検索がコンピュータ科学、数学、意味論、言語学と強い結びつきを持っているのに対し、情報探索行動は理論的、方法論的アプローチにおいて社会科学に依拠している。しかし、情報検索と情報探索行動の融合を試みる研究もある。
- 3) 学問志向の図書館情報学では、図書館職との結びつきは大いに緩むか、断ち切られている。学問志向の図書館情報学の目標は図書館情報学を他の学問（コンピュータ科学、化学、社会学）と同じ土俵に立たせることである。学問志向の図書館情報学では、図書館情報学をシステム（データベースや図書館）志向やドキュメント志向ではなく、「利用者中

心」(user-centered)として説明する傾向がある。学問志向の図書館情報学では、あらゆる文脈や機関における人の情報行動そのものを研究する。

- 4) 図書館情報学教育はそのコア領域に焦点を当てる。そうすると、論理的に各主題からのアプローチになり、図書館管理、情報機関、それらの社会的役割、読書やリテラシーの社会学、等には目を向けなくなる。
- 5) 学問志向の図書館情報学の研究者は、自分たちを現代的でダイナミックな図書館情報学研究者と見る傾向がある。伝統的な図書館情報学が、インフォメーション・アーキテクチャー、タクソノミー、オントロジー、メタデータ、フォークソノミー等の用語を聞くと機嫌が悪くなる人々から成るのに対し、自分たちを情報科学者と規定する彼ら(学問志向の図書館情報学の研究者)は、そのようなコンセプトやアプローチを採用する傾向がある。
- 6) 図書館領域外で新しい情報専門職が出現している状況下で、また機関としての図書館の重要性が減少している状況下で、学問志向の図書館情報学の研究者は、従来のコア領域を超えるコアを確立するために学問志向の図書館情報学が必要である、と考えている。

学問志向の図書館情報学が図書館情報学の発展に大きく貢献していることは間違いない。歴史的に見ると、伝統的な職人育成の図書館情報学は、統計学、数学、コンピュータ科学、社会科学から輸入された科学的な方法論に取って代わられた。図書館情報学は、心理学(認知的アプローチ)、コミュニケーション学からも影響を受けた。言説分析(discourse analysis)やグラウンデッド・セオリーのような理論的、方法論的アプローチも導入された。サブ領域である情報探索行動では、累積研究ではなく、同じような研究(認識

的アプローチ、意味付与アプローチ、タスク複雑アプローチ、ロール理論等)が数多く行われている、という批判もあるが、累積研究のための理論的プラットフォームは開発されている。しかし、次のような逆説の可能性もある。

- 1) 学問志向の図書館情報学はコアを同定することに拘っているが、そのアプローチはコアを蒸発させる結果になる可能性もある。そして、他の学問と図書館情報学を区別するのを難しくするかもしれない。図書館情報学を他の学問の付録に貶める可能性もある。
- 2) 図書館情報学の学問志向はブーメラン効果をもたらすようにも思われる。その結果、職業訓練的なアプローチに逆戻りする可能性もある。

上記1)の逆説の可能性に関して説明すると、科学的分野は研究対象が科学分野であると同時に、研究の方法も科学的であるという特徴を持っている。学問志向(科学的方法志向)の図書館情報学においては、情報探索行動は機関やシステムの枠を超えて行動の1形態として研究されるようになっているが、それは一種の矛盾を惹起させる。例えば、投票行動や消費者の意思決定プロセスは情報探索行動であるが、政治学や経済学の1分野でもある。このように、図書館情報学と他の学問の境界が不明瞭になる。

報告書『ヨーロッパにおける図書館情報学教育カリキュラムに関する熟考』は、図書館情報学を著者と読者(users)の間の伝達チャンネルを研究する学術領域(academic field)、もしくは学問(discipline)と定義している。仲介役割(mediator role)に焦点を当てることによって、図書館情報学を仲介を組織化する学問(science)と定義することができる。これは、図書館情報学が、一連の社会機関(伝達チャンネル)と制度化された社会实践(仲介)とにリンクしていることを意味する。このような定義をすることによって、投票行動や消費者の意思決定プロセスを研究テーマに挙げるができる。

例えば、消費者に妥当な情報を与える情報ポータル役割や利用の研究、市民の情報を仲介する図書館や図書館員の役割の研究は、市民や消費者に対する知識への図書館情報学の貢献になるだろう。

上記2)の逆説の可能性に関して説明すると、次のようになる。情報技術の進歩により、インフォメーション・アーキテクト、知識管理者、情報管理者等が出現している。図書館情報学はこれらの新しく出現している職業に適応しなければならないが、その適応の速度は遅く、図書館情報学にとっては挑戦にもなっている。また、その新しい職業の出現は学問志向の図書館情報学とは逆方向に向いている。図書館職との結びつきを緩やかにし、新しく出現している職業に適応した教育プログラムを展開するということは、学問的理論に裏付けられない職業教育へと進展する危険性を帯びている。専門職的理論とバランスを取らない学問志向の図書館情報学教育は多くの特殊な職業教育へ変身し、結局、図書館情報学は分断し崩壊する恐れがある。

2004年にスウェーデンの高等教育局は、文書館・図書館・博物館教育を評価する委員会を設置した。委員会は調査を始める前に、何を調査するか、すなわち図書館情報学とは何か、図書館情報学のどの部分の教育を含めるか、という点で意見の調整を図った。その結果、すべての図書館情報学教育が次の4項目を含めるべきであるという結論に達した。

- 1) 図書館情報学部の卒業生は、知識の組織化と検索、およびその底に横たわる原理や理論を完全に理解する。
- 2) 1)に加えて、図書館情報学スペシャリストは、収集され、組織化され、仲介される内容についての知識を有する必要がある。すなわち、図書館情報学スペシャリストは、文化的知識、リテラシーの知識を有する必要がある。それは、内容を知らず形式だけを知っている図書館員は仲介者としては機能しないということを意味する。

- 3) すべての知識管理システムは認識論的に構築されている。図書館情報学は社会的に構築された現実と関わっている。学生の反省的、批判的能力を育成するためには、様々なシステムの認識論的前提を批判的に分析できるよう、学生に認識論や知識の理論が教授される必要がある。
- 4) 学生に、大きな社会的文脈の中で図書館情報学の機関や図書館情報学の実践を理解し分析する能力を育成する必要がある。すなわち、図書館情報学は社会的環境の中でどのように形成されているか、図書館情報学はその環境をどのように形成しているか、図書館情報学専門職の社会的役割は何か、その役割が社会的変化によってどのような影響を受けているか、を学生に教える必要がある。

以上4項目を挙げたが、肝心なことは、図書館情報学を仲介者（専門職）として機能するのに必要な能力を育成する学際的な事業（学問）、と委員会が記述したことである。それは、専門職の実践者を自分の役割を総体として実践できる人、として描いている。さらに、確立していることを実践するだけでなく、それらの実践を批判し、洗練させ、発展させる反省的実践者としても描いている。

『ヨーロッパにおける図書館情報学教育カリキュラムに関する熟考』の中の情報探索行動や知識管理と関連する部分は、上記の委員会の図書館情報学の理解と一致している。人文学や社会科学を基盤にしての人間の行動や意味構築の研究や教育は、システム志向や技術と統合されるべきである。

図書館情報学専門職のコンピテンシーは知識管理に限るべきではない。しかし、そのコンピテンシー無しでは専門職は成り立たない。（図書館で実践されようが、他の場所で実践されようが）図書館職は様々な主題の知識とスキルの混合である。ヨーロッパではコンピュータ科学、インフォマティックス、



文芸社会学等の学科が図書館情報学プログラムを提供している。このような学科から自分の好みで科目を選択し履修したならば、それは専門職教育にはならない。学生は、学生時代、図書館情報学や図書館情報学の実践について熟考する立場にある。すなわち将来、製薬会社の情報スペシャリスト、政府機関のアーキビスト、web マスター、児童図書館員等、のいずれになりたいか、を熟考するのである。

## 4.2 考察

オーダソン<sup>37)</sup>の論文は極めて理論的であるが理解するのは難しい。しかし、現在、図書館情報学には学問志向 (discipline-oriented) と専門職志向 (profession-oriented) の2大潮流があり、オーダソンが専門職的理論を取り入れた図書館情報学、すなわち専門職学問 (professional science) を支持していることは理解できる。また、『ヨーロッパにおける図書館情報学教育カリキュラムに関する熟考』にも見られるように、ヨーロッパでは全体的に専門職志向の図書館情報学が優勢のように思われる。

オーダソンが論じるように、学問志向の図書館情報学は他の学問と同じ土俵に立つことを目指しており、名実共に「情報学」として確立させようとしている。1つの例は、「2.4考察」で言及したクローニンらの論文「A Bibliometric Chronicing of Library and Information Science's First Hundred Years」である。ヨーロッパでは、アストロム (F. Astrom) が2006年の博士論文 “*The Social and Intellectual Development of Library and Information Science*” で、同様な志向を展開している。アストロムは、その博士論文で、1960年代に図書館学と情報学が合体して図書館情報学が出現し、図書館学と情報学はそのサブ領域になった、と記している<sup>37)</sup>。クローニンとアストロムの場合、その学問の名称は「図書館情報学」にしている。本稿では

言及できなかったが、他の多くの学問志向の図書館情報学関連の論文でも、名称も内容的にも情報学を志向している。オーダンソンは、専門職的理論とバランスを取らない学問志向の図書館情報学教育は、情報技術の進歩により多くの特殊な（高度な）職業教育へ変身し、結局、図書館情報学は分断し崩壊する恐れがあると論じている。その議論は、3章でベイツが述べている「すべての専門職は一般的な理論体系の習得と理解を必要とする。専門職員は一連の現実世界の課題を解決するためにその理論体系を選択的に、かつ創造的に応用する。（中略）すべての専門職は理論、調査研究、実践ベースの原理、長い経験と長老の実践者の熟考から生まれる一般的な知識体系を有している。」と、相通じるものがあるように思われる。

オーダンソンは、2004年にスウェーデンの高等教育局は文書館・図書館・博物館教育を評価する委員会を設置した、委員会は調査を始める前に何を調査するか、すなわち図書館情報学とは何か、図書館情報学のどの部分の教育を含めるか、という点で意見の調整を図った、と述べている。そのことから、また他の文献等（次に紹介するマイバーグとタマロの論文も含めて）から、ヨーロッパでは、図書館情報学教育はライブラリアン、アーキビスト、学芸員を育成し、図書館情報学の根底には図書館、文書館、博物館があるように思われる。

オーダンソンは2013年開催の「図書館情報学の概念に関する国際会議」(International Conference on Conceptions of Library and Information Science)において、タイトル「From Collections to Connections: Building a Revised Platform for Library and Information Science」を他の人と共同で発表しているが、その内容は基本的に上記の論文と同じである。

その論文では、以下も記されている。

図書館情報学は専門職学問 (professional science) である。専門職とは科

学的、研究的基盤に基づく知識の上に構築された職業である。専門職の実践者は大学の専門職学部でその科学的（学問的）知識を修得しなければならない。大学の専門職学部と実践者の間には強い相互依存関係がある。高度に発達した専門職の間でその相互依存度は強い。情報の役割や利用の研究は、図書館情報学特有のものではなく、殆どの学問、少なくとも社会科学は、情報の役割や利用の研究と関わっている。情報と関わっている他の学問との相違点は、知識コレクションの組織化の使命を有する情報専門職とリンクしている、という点である。

ライブラリアンは、組織化されたコレクションを基盤に、知識の共有、知識の創造、学習や文化の経験に関連する社会的プロセスを起こし刺激する。社会的プロセスとは使命を意味し、コレクションは道具である。デジタル時代以前は、コレクションがライブラリアンの注意とエネルギーの殆どを要求した。図書館を建築する際には、コレクションのサイズが大きな要素となった。コレクションの管理要素が膨大であったために、それが図書館職のコアであり使命だと勘違いされることが多かった。しかし、デジタル時代になって、その必要性（コレクションの管理要素）が少なくなり、ライブラリアンは本来の使命に戻ることができるようになった<sup>38)</sup>。

最後に、オーダンソンの図書館学や図書館情報学に関する理解をまとめると、彼は基本的に図書館学や図書館情報学を区別していない。すなわち、彼はエスタブルークのように、図書館情報学を図書館学から発展したものと理解していないということの意味する。また、「ヨーロッパでは、図書館情報学には職業的、学問的、専門職的アプローチがある。」とも記しているので、図書館情報学の概念を極めて緩やかに捉えていると思われる。彼の関心は、現代の図書館情報学と呼ばれるものが学問志向（discipline-oriented）の傾向にあり、それを憂慮し、その志向が如何に矛盾したものであるかを証明

することにあつたと思われる。

## 5. マイバーク (S. Myburgh) とタマロ (A.M. Tammaro) の 理解する図書館学 (librarianship) と図書館情報学

(マイバークとタマロの論文 “Education for Digital Librarians: Some European Observations” の中の図書館学と図書館情報学に関する言説を以下に紹介し、若干の考察を試みる。この論文ではマイバークが第1著者になっているので、マイバークを最初に記している。)

### 5.1 マイバークとタマロの図書館学と図書館情報学

EU (European Union) は、2005年に「Europe 2020」計画を作成した。目標の1つはEUにおける教育、特に高等教育のレベルアップにあつた。そして、「Digital Agenda for Europe」が戦略の1つとして採用された。それは2020年までにデジタル経済を繁栄させることを目標にした。「Digital Agenda for Europe」の重要政策の1つとして「デジタル図書館化計画」(Digital Libraries Initiative) がある。その目標は、すべての人にヨーロッパの文化的、視聴覚的、および科学的遺産をアクセス可能にすることである。「デジタル図書館化計画」は、デジタル図書館 (digital library) を次のように定義している<sup>39)</sup>。

公衆に入手可能なデジタル・コンテンツの組織化されたコレクション。それはデジタル図書など、図書館や文書館のデジタル化された資料で構成されることもある。また、最初からデジタル形式で生産された情報で構成されることもある。

「デジタル図書館化計画」は上記のように定義しているが、デジタル図書館は複雑な「社会技術的なシステム」(sociotechnical systems)である。デジタル図書館は社会的な基盤であり、社会的な目的と効果を有している。「社会技術的システム」という理解の仕方が学際的な研究アプローチを奨励する。図書館情報学教育 (library and information science education) では、教育内容や方法に関して多くの研究が行われてきているが、デジタル図書館の出現がライブラリアンに知識基盤を再構築させ、他の情報専門職員と統合させ、コミュニティとより深く関わることによって、現代技術の新しい要求にも応えられる機会を与える。

経済を強化し、教育レベルを上げるために ICT を利用しようとする EU の大望もしくは野心の刺激を受けて、学問としての図書館学 (librarianship)、専門職としての図書館職 (librarianship) の再考が必要になってきている。現在、図書館職は次の 4 つの課題を抱えている。

- 1) 図書館職 (librarianship) は学問的専門職 (discipline/profession) として説明される必要がある。
- 2) 図書館職に理論的枠組み (theoretical framework) が必要である。そして、それには当然「核となる知識」(core knowledge) が要求される。
- 3) 情報専門職のメタコミュニティ (図書館・文書館・博物館) のすべての人によって理解されねばならない理論的構造 (theoretical structure) の 1 つが概念的明瞭性 (conceptual clarity) である。特に、「information」の概念の明瞭化が必要である。
- 4) 情報社会におけるライブラリアン独自の社会的目的もしくは責任性があり、その解明が必要である。

情報専門職が専門職になるためには理論的基盤と社会的目的が必要である。

しかし、図書館情報学（library and information science）においては理論構築に課題を抱えている。理論の欠乏は多くの図書館情報学の文献の中でも指摘されている。しかし、図書館職（librarianship）は学問的専門職（discipline/profession）として理解できる。何故ならば、それは理論的側面と実践的側面を備えているからである。専門職（profession）に関して述べれば、専門職は社会で果たす役割によって定義される。専門職は実践するための学問的、理論的基盤を必要とし、認識論的なコミットメントを提示し、実践を支える理論を進展させる学問を必要とする。学問（discipline）は、研究の対象、理論、認識論的なコミットメント、価値観等を提供する学問文化（disciplinary culture）を含んでいる。特定の学問はその学問の対象に対して特定の見方を提供する。知識領域は研究の対象およびその学問の研究手法と手続きによって決まる。理論は学問の核である。（用語の）概念は理論の核であり、複数の概念が組み合わさって理論が成立する。

しかるに、図書館学や情報学の理論の核である「情報」（information）の概念は明瞭ではない。スクレイダー（A.M. Schrader）は、1986年に情報学（information science）の文献を調査し、「information」の概念は134種もあることを発見した。現在のところ、情報職とは何であり、情報社会において情報職がどんな意義を持つかを明確にし、社会の情報問題の解決や社会的向上の使命を帯びているライブラリアンや他の情報専門職の社会的役割や責任に関連する情報理論は存在しない。この20年間に図書館情報職に準拠枠（frame of reference）の変更が起こっているが、図書館情報学における理論と認識論的コミットメントの欠乏故に、図書館情報職を脆弱なものにしていく。シャノン（C.E Shannon）とウィーヴァー（W. Weaver）<sup>41)</sup>によって開発されている情報理論（コミュニケーション理論）があるが、それはデータ（data）、情報（information）、意味（meaning）の用語の関連を解明するため

の理論であり、コンピュータ科学者や通信科学者には有用であっても、(図書館・文書館・博物館分野の) 情報専門職にはあまり有用ではない。

「information」と「ICT」はまったく異なる概念であるが、ヨーロッパでは(その他の国でも) 同じ意味で使われることが多い。それ以上に、歴史的に見た場合の問題は「ドキュメント」(図書やコデックスなど) と「情報」の関連である。情報関連の学問は歴史的に「ドキュメント管理法」を特徴としている。そして、それは実践にも及んでいる。実践の場所(図書館・文書館・博物館) が情報関連の学問の中核になっている。デューイ(M. Dewey) が設定したモデルが継続され、英語圏ではドキュメントの集積であるコレクションの管理が情報関連の学問の中核になっている。すなわち、目録作成、分類、シソーラス構築、等である。しかし、デジタルな世界では、物理的な排列やアクセスは最早存在しない。その上、ドキュメントの記述は異なる方法、すなわちコンピュータの中で行われる。

我々は、デジタル図書館の定義に関しては、デジタル図書館連合(Digital Library Federation)<sup>42)</sup>の次のような定義を支持する。

デジタル図書館(digital library)とは、デジタル・コレクションがある一定のコミュニティに容易にかつ経済的に利用可能になるよう、デジタル資源を選択し、構築し、知的アクセスを可能とし、解釈し、提供し、無傷性を保ち、長期の保存性を維持する、専門スタッフも含めた組織体(organization)のことである。

ドキュメントの物理性とデジタル化された際のその消失は、図書館の問題を複雑にしている。しかし、図書館(特にデジタル図書館)の目的は知的活動を活発化させることであることに変わりはない。その活発化は、ライブラ

リアンが、知識がどのように生産され、何の目的で生産されるかを理解することにより、さらには記録された文献の中で如何にしてその知識を見つけるかを知ることにより実現する。

上記のように理解すると、図書や ICT は目的達成のための手段であり、ライブラリアンの職務、養成、そして社会的責任に関しては大幅な修正が必要になる。個人・組織・社会が知識を生産し入手できるようにすることが情報専門職の究極の目標である。その際には、情報専門職およびその知的基盤となる情報関連の学問には、「知識」(knowledge)、「情報」(information)、「ドキュメント」(document) の概念の明確化が必要になる。

我々は、それらの用語に関して次のような定義を提唱する。

- 1) 「知識」(knowledge) : 「知識」とは知っているということである。それは、経験、非経験の中で積み重ねられるものである。人は意味あるものにするために個人的な経験を熟考したりする。また他人に言われたことに関して、(意識的、無意識的に) それはおかしいかもしれないと思いながら熟考する。人はまた生産力があり、洞察力や発明力(工夫の才)を有している。現有の知識、パーソナリティ、コンピテンシー、および能力がその人の知ようになるものを形成する。
- 2) 「情報」(information) : 「情報」とは、図書館情報学に関する限り、我々が特定の人々と特定の時間に特定の方法で共有することを選択した知識の部分である。我々の知識(アイディア)を共有する(伝達し合う)唯一の方法は、ダンスする、歌う、描く、話す、等のある手段で表現することである。すなわち、シンボルの仲介が必要になる。そのシンボルの意味は共有されなければならない、それはまた文化的拘束性を有している。
- 3) ドキュメント(document) : 情報は話し言葉で表現されるかもしれない



し、文字で書かれて記録されるかもしれない。すべての文字は文化的シンボルであり、本来は何の意味も有しない。文字は機械しか認識し得ない2進法のコードもしくは一連の電子パルスに変換されてデジタル化されるかもしれない。それらのすべて（ペン、紙、プリント、電子パルス、磁気テープ、ハードディスク等）が情報の容器である有形の「ドキュメント」を作り出す。ここで規定するドキュメントは、情報を運ぶか、もしくはある意味で知識のコード化された表現である自然物、人工物もしくは他の実体を指している。言語学や言説分析で使われるテキスト（text）と、おおよそ同じ意味である。

情報専門職が社会的責任を果たすために取り組まなければならないのは、ドキュメントではなく、ドキュメントが含んでいる情報である。ドキュメントは時間的空間的制限を取り除く形で情報を記録するために存在する。ライブラリアンは、利用者を妥当な情報へ案内したり、利用者に加えて生産者にもなるよう激励したりすることによって、利用者の人生変革のための役割を果たせるようにしなければならない。

上記のような定義や議論が受け入れられるならば、ドキュメントが物理的なものからデジタルなものに変わっても、情報専門職の役割は何ら変わることはない。

図書館は、中立的立場を維持しながら、情報へのアクセスをコントロールすることによって意見の醸成に影響を与えたり、情報の批判的解釈に関して手助けしたりすることができる。それは、個々人が自分なりの結論を出せるように特定の課題に対してあらゆる見方を準備することを意味する。情報は決して倫理的に中立ではない。ドキュメントに記録された情報はまったく異なる方法で理解されることもあり得る。また、まったく異なる意味を有した

り、相反する意味を有したりする。テキスト（ドキュメント）の内容は、社会的文脈によって形成された社会的現象として理解することができる。社会的文脈はテキストが作成された環境や他のテキストとの関連も含んでいる。テキストをネットワークの結節点として理解することができる。個々のテキストは、それらの文脈を形成するテキスト間や物理的な網目で関連付けられている。あらゆるテキストが様々な作品を関連付け、特定の言説を表明する、文献基盤の結合点の体现である。

我々は、テキストに関するバルト（R. Barthes）の以下の言説を支持する。<sup>43)</sup>

テキストは、立体環境下でその中に横断する引用、参考、反響、文化的言語で織りなされている。すべてのテキストが要素になっている間テキスト性（the intertextual）は、それ自身また他のテキストのテキスト間（text-between）であり、他のテキストのオリジナルであると勘違いしてはならない。ある作品に影響を与えたもの、すなわち元（sources）を見つけようとすることは、認知の神話に陥ることになる。テキストを形成するようになる引用（citations）は匿名であり、追跡不可能である。しかし、それらは既に読まれていて、転置形のコンマ無しの引用である。

バルトは、テキストの完全な理解もしくは意味創造において、間テキスト性（intertextuality）が重要であると考えている。メタデータとネットワーク・リンクを特徴とするデジタル図書館は、このような理解を容易にしてくれる。ライブラリアンはアイデアおよびその形成（formation）と創造（creation）について知らなければならない。テキストがデジタル形であろうとアナログ形であろうと、テキストの複雑性を知ることは、ライブラリアン、アーキビスト、学芸員に関わらず、すべての情報専門職にとって重要である。

テキストの意味に関しては、出版社、印刷所、タイプセッター、編集者も関わっている。デジタル・ライブラリアンは、テキストのデジタル版はテキストに等しいものであると思ってはならない。

我々はまた、シャルティエ（R. Chartier）<sup>44</sup>の次のような言説を支持する。

テキストは常に特定の実質のあるもの（materiality）によって運用される（conveyed）。すなわち、（テキストが）書かれたり、コピーされたり、印刷されたりする実体（object）、読んだり、朗読したりする声、聞かせるためのパフォーマンス、すべてが実質のあるものである。それらのフォームはそれらの独特の流儀でアレンジされ、各フォームは異なる方法で意味が如何に醸成されるかに影響を与える。

シャルティエの上記の言説を根拠にしてデジタル・ドキュメントの解釈、ライブラリアンの職務等について述べると、次のようになる。

利用者がデジタル・ドキュメントを見つける際、または解釈して意味を形成する際の援助法において、情報専門職には多くの努力が必要である。そのような努力は今まで行われてきていない。そして、すべてのテキストが同一の機械上で表示されるようになって、その努力はもっと強調されねばならなくなっている。デジタル・ライブラリアンの養成論議において、職務の遂行（秩序と保護）とその目的（知的強化）の2面性については明確にされていない。図書やドキュメントの倉庫であると同時に研究と学習のための施設であるという分裂病的な「図書館概念」が、ドキュメントの奇妙な分裂的性格（ドキュメントという物理的な存在とドキュメントの含む無形のアイデア）を生んでいる。デジタル化されたドキュメントを扱う情報専門職にとって、ドキュメントは情報のキャリアか、情報の容器か、それともその両方か、を明確

にする必要がある。ライブラリアンは物理的なドキュメントの管理技術よりもドキュメントが含むアイデアにより多くの関心を注ぐべきだ、という理解の仕方は新しいものではない。シェラ (J.H. Shera)<sup>45)</sup> は、科学は物を扱い、ライブラリアンはアイデア、概念、思想を扱う、と述べている。さらに、ライブラリアンは彼ら／彼女らの使う道具 (instrumentation) ではなく、彼ら／彼女らの有する知識によって特徴づけられるべきである、とも述べている。これは、ライブラリアンの職務がユニークなものであり、情報技術者の職務とは区別されるものであることを示唆している。また、ライブラリアンが文化の記憶や記録等を保存することを目的とするアーキビストや学芸員の仲間であることも示唆している。

ICTの進展によりすべての文化機関や図書館は無用のものになると示唆する研究者も存在する。<sup>46)47)</sup> EUの「Digital Agenda for Europe」戦略にも、そのような伏線が見られる。情報がデジタル化され、ネットワーク化されると、情報専門職および彼ら／彼女らの管理するコレクションも同じ運命をたどり、情報技術者とコンピュータ科学者が代わりに新しいツールを開発し、内容を取り込み、アクセスを準備する、と予言している。表面的には理屈に合っているように見えるが、よく吟味すると、ICTを取り入れている他の専門職は取って代わられず、ライブラリアンだけが取って代わられると論じるのはおかしい。ライブラリアンに対してこのような予言が出てくる背景には、ライブラリアンも含めた情報専門職 (アーキビストや学芸員) が、情報技術者やコンピュータ科学者と「情報」(information) という同じ土俵に立っているからである。しかし、上述のように、ライブラリアン・アーキビスト・学芸員のような情報専門職の扱う「情報」と情報技術者やコンピュータ科学者が扱う「情報」の概念は異なり、また社会的目的も異なる。

## 5.2 考察

この論文は基本的にデジタル・ライブラリアン養成論であり、2章のエスタブルークの文献のように、直接的に図書館学と図書館情報学に関して論じている訳ではない。しかし、その論文の中に著者たち（マイバーグとタマロ）の図書館学や図書館情報学に対する理解の仕方を同定することができる。

それをまとめると次のようになる。まず著者たちは、現代の図書館専門職は学問的専門職（discipline/profession）になっていないと認識している。それは、図書館専門職が学問に基づく職業になっていない、という認識に基づいている。すなわち、図書館情報学は学問になっていないという認識につながる。その中には図書館学も含まれている。著者たちは、図書館情報学が学問になっていないと理解しているために、図書館学から図書館情報学へ変化したとは捉えていない。著者たちにとって、その2つの学問間に差異はない。

著者たちは、図書館情報学が学問になっていない理由を明らかにするために、学問論を展開してみせる。著者たちによれば、特定の学問はその学問の対象に対して特定の見方を提供する。知識領域は、研究の対象およびその学問の中での研究方法と手続きによって決まる。理論は学問の核であり、概念は理論の核である。このような学問論を展開して、著者たちは図書館情報学において理論の核である「情報」の概念が明瞭でないことを指摘する。

図書館界、特にアメリカの図書館界では、図書館学が図書館情報学に変わった頃にシャノンとウィーヴァーの提唱する情報理論を採択して、図書館情報学も核である「情報」の概念を明確にし、学問的専門職になったと信じられている、と推測される。しかし、著者たちは、その情報理論は図書館情報学の理論には適しないと論じる。確かに、図書館学や図書館情報学の文献で使用されている「情報」の意味は曖昧で、シャノンとウィーヴァーの「情報

理論」の「情報」の意味で使われることもあるが、多くの場合「情報」と「知識」を使い分けていない。その混合（混同）は上記のエスタブルークの文献にも散見される。さらには、「情報」と「情報源」は交互に使われている場合も多い。コペッツ (H. Kopetz) は2014年の論文の中で、社会では「情報」は「データ」、「テキスト」、「絵」、「様々なメディアが含む内容」に使われていると指摘している<sup>48)</sup>。ジンス (C. Zins) は、2007年の論文の中で、「情報学 (information science) では「データ」と「情報」という基本的な用語の概念は明確に規定されていない」と論じている<sup>49)</sup>。ジンスの「情報学」には図書館情報学も含まれている。遡って、1982年にグリア (R.C. Greer) が、1991年にはピアス (S. Pierce) が、図書館学には理論が欠けていると論じている<sup>50)51)</sup>。このようなことから、図書館学や図書館情報学には核となる「情報理論」が存在しない、という著者たちの指摘は納得できる。

上記のデジタル図書館連合のデジタル図書館定義を敷衍して、物理的なドキュメント（情報源）も所蔵している現代の図書館の定義を試みると、次のようになるだろう。

図書館とは、物理的コレクションやデジタル・コレクションがある一定のコミュニティに容易にかつ経済的に利用可能になるよう、物理的資源やデジタル資源を選択し、構築し、知的アクセスを可能とし、解釈し、提供し、無傷性を保ち、長期の保存性を維持する、専門スタッフも含めた組織体のことである。

上記の定義を可能にするためには、1) 図書館職（図書館情報職）は知的専門職であり、2) 図書館（もしくはライブラリアン）は独自の社会的目的もしくは責任性を有している、という前提（理解の仕方）が必要になる。前述

の「デジタル図書館化計画」の「デジタル図書館」の定義の敷衍形：「公衆に入手可能な物理的なコンテンツやデジタル・コンテンツの組織化されたコレクション」が、図書館界における一般的な図書館の理解の仕方であると思われるが、今後は上記のような定義が必要だと思われる。この定義で「専門スタッフも含めた」は、そこで働く職員は職務内容からして知的職員であり、図書館職（図書館情報職）は専門職であるということを示唆している。専門職であるということは、著者たちによれば、1）実践を統治する核となる知識の存在、2）その専門職がその知識基盤に基づいて解決しようとする社会的問題（社会的ニーズ）の存在、3）自律性、等を有している、ということである。ここでは、1）「核となる知識」と2）「社会的ニーズの存在」に関して考察してみたい。

著者たちが論じるように、図書館学でその知識基盤になっているのは「知識」や「情報」ではなく、基本的にその容器である情報源（著者たちの言う「ドキュメント」）である。「コレクション構築論」、「資料組織論」、「閲覧サービス論」等が端的にそれを示している。エスタブルークが理解する図書館情報学への変貌により、「情報サービス論」等が出てきていると思われる。そのようなことから、著者たちが論じるように、図書館情報学が学問となり、図書館情報職の準拠枠になるためには、「知識」、「情報」、および「情報源」（著者たちの言う「ドキュメント」）の概念整理、明確化が必要であろう。著者たちが提唱するそれらの用語の概念規定は説得力がある。著者たちの提唱する「知識」と「情報」、「ドキュメント」の概念規定は、通常理解されているものから少しかけ離れているかもしれないが、図書館情報学の学問化には有効であると思われる。学問はその研究対象に対して特定の見方を提供する訳だから、図書館情報学独自の「知識」、「情報」、および「情報源」（ドキュメント）の概念を有してもおかしくないと思われる。ベイツも、2005年の論文

で「知識」、「情報」、「データ」の整理をしているが<sup>52)</sup>、シャノンとウィーヴァーの「情報理論」の延長線上にあり、マイバーグとタマロの概念が図書館情報学には適しているように思われる。

次に、専門職のもう1つの条件である社会的ニーズの存在について考察してみる。図書館職（図書館情報職）が解決しようとする社会的ニーズは存在するだろうか。存在するとすれば、それは何だろうか。著者たちによれば、それは市民の知的活動を活発化させることであり、その究極の目標は個人・組織・社会が知識を生産し入手できるようにすることである。そして、それは、ライブラリアンが、知識が何の目的でどのように生産されるかを理解することにより、さらには記録された文献の中で如何にしてその知識を見つけるかを知ることにより、達成される。わが国の「図書館法」には、公共図書館は「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」と規定されていて、「教養、調査研究、レクリエーション」の3者のバランスの取り方が論議的になることが多いが、マイバーグとタマロが論じる「市民の知的活動の活発化」を念頭に置く必要があると思われる。また、上記の図書館の定義の中にある「物理的コレクションやデジタル・コレクションがある一定のコミュニティに容易にかつ経済的に利用可能になるよう、物理的資源やデジタル資源を選択し、構築し、知的アクセスを可能とし、解釈し、提供し、無傷性を保ち、長期の保存性を維持する（後略）」は、社会的ニーズに応えるため（社会的目的を達成するため）の職務やサービスである。わが国では、そのような区別ができていない場合が多いように思われる。著者たちの言う社会的ニーズは、日本の公共図書館界でよく知られている「国民の知る自由」と言い換えることもできると思われる。日本では、「知る自由を保障する」という簡明な表現のために、専門職（員）



によって初めて達成されるその本質的な目的を見抜くことが難しく、職務やサービスを目的として解釈したり、図書館学が情報源を基盤にしているために「情報源の構築、組織化、提供」を本質的な目的のように錯覚したりしていることも多いと思われる。そして、「資料提供の自由」や、「閲覧カウンターで利用者の要求がわかる」という理論／理念を展開している。今後は、デジタル図書館連合のデジタル図書館定義の敷衍形である上記の図書館定義を採用し、著者たちの提唱する「知識」、「情報」、および「情報源」（ドキュメント）の概念を採用して、図書館情報学を学問化させる必要があると思われる。著者たちの提唱する「ドキュメント」の概念は、哲学者の言説を引用したりして理念的過ぎるが、デジタル情報時代になり視覚で認識できない「ドキュメント」も出現すると、そのような概念規定が必要になるとと思われる。

マイバーグは、2013年刊の『デジタル時代における傾向、発見、人々』（*Trends, Discovery and People in the Digital Age*）の中に「Free at Last」というタイトルの論文を掲載している。その中に、現代の図書館情報学やライブラリアンに対するマイバーグの理解が明瞭に記されているので、最後にその概略を記す。

現代社会は、社会経済的、技術的、教育的変化が混合して起こっている社会であり、個人、団体、機関、社会、および文化に変容をもたらしている。急速な ICT の発達、デジタル・ドキュメントの増加、グローバル化、ソーシャルネットワークキング、インタラクティブなドキュメントの創生等により、過去30年間に情報学（information discipline）とその実践にも大きな変化をもたらしている。その結果、図書館情報学（library and information science）は窮地に陥っている。ICT の発達により、図書館情報学、その実践者、コレ

クションは無用になるだろうと示唆する図書館情報学の文献が多くなっている。予算カットに合い、閉館を余儀なくされている図書館や情報センターも出現してきている。今日では、図書館情報学やその実践者は流行らず、情報技術を扱う専門職が重視されている。その結果、「情報」と「技術」が区別されていないこともあって、情報に関わる仕事はあまり理解されていない。

ライブラリアンは時代遅れで、科学技術恐怖症でデジタル社会に適応できず、ありふれた仕事しかできないと信ずる無知の人たちによって、図書館情報学は格下げされている。ライブラリアンは物理的な物としてのドキュメントにしか関心を持っていないと理解されている。そのように理解されると、物理的な物がデジタル化されると、ライブラリアンは不要になるだろうという推測は当を得ている。

「印刷」という以前の技術が、ライブラリアン、アーキビスト、記録管理者という情報専門職に物理的な物の管理、それら物の整理、それらを保管するスペースに焦点を当てさせたことは間違いない。選択、組織化、保存、アクセスの準備によって大量の物理的ドキュメントを管理する必要があったために、ライブラリアンは、いつの間にか、ドキュメントに含まれているアイデアよりもドキュメントそのものに多くの関心を注ぐようになった。ライブラリアンが伝統的に扱ってきたドキュメントの物理性が、図書館情報学の焦点を実践の場所である図書館に向かわせた。場所やスペースとしての図書館が、ライブラリアンがそこで遂行する業務より重要になっている。

図書館情報学を苦境に陥らせているのは、実は ICT ではない。ICT はライブラリアンの業務に大きな変革をもたらしている。物理的な物の管理と関連する技術的（technical）な仕事（選択、組織化、保存とアクセスの準備）は、ICT によって変化、減少、もしくは包摂される。ライブラリアンが長い間遂行したかったこと（教育と文化化）と実際に遂行していることとの溝は、

適切な技術がなかったために埋められなかった。ライブラリアンが遂行してきた多くの業務は事務的なものであった。そして、多くのライブラリアンが目録規則と関わる課題を図書館情報学の核と考えている。ICT は技術的 (technical)、事務的、反復的業務を遂行し、ライブラリアンを本来的な業務へ向かわせる。ICT の発達は、情報関連の職務の再概念化や活性化をもたらし、文化保護者 (ライブラリアン、アーキビスト、記録管理者、学芸員) の役割の再考を促す。社会の情報問題を解決するために存在する専門職員は、知識創造のプロセスやコミュニティにおける情報の流れに対する理解がまだ不足している。現代の最大の変化は、機関としての図書館からライブラリアンや他の情報専門職の役割へ焦点が移ってきていることである。<sup>53)</sup>

## 6. 結び

以上、アメリカの図書館情報学研究者 2 人、ヨーロッパの図書館情報学研究者 2 人 (もしくは 3 人) の図書館学、図書館情報学、情報学に関する議論を概観してきた。エスタブルークは1960年代に図書館学から図書館情報学へパラダイム・シフトし、現代は情報学との領域争いを行っているとし、ベイツは「メタディシプリン」という概念で専門職学問群を分類し、その中に情報関連の学問群 (information disciplines) も入れ、情報関連の学問群を詳しく分析している。オーダソンは現代の図書館情報学に学問志向と専門職志向の 2 大潮流があるとし、学問志向の図書館情報学の問題点を指摘している。マイバークとタマロはデジタル図書館員の養成の観点から、図書館学や図書館情報学が専門職学問になっていないことを指摘し、「知識」、「情報」、「ドキュメント」の概念の明確化を試みている。

それら 4 者 (もしくは 5 者) の議論は、議論の焦点が異なり、展開されて

いる理論の難しさもあって、単純な比較はできないが、それらの議論を総合することによって、図書館学や図書館情報学の輪郭は把握できたと思われる。また、図書館学や図書館情報学が伝統的に専門職を基盤にした学問であるために、図書館情報専門職（ライブラリアン職）やその養成にも言及され、アメリカやヨーロッパのライブラリアンやその養成状況も知ることができた。

現代の図書館情報学には学問志向と専門職志向の2大潮流があり、またヨーロッパでは2、3年毎に「図書館情報学の概念に関する国際会議」(International Conference on Conceptions of Library and Information Science)も開催されており、図書館情報学は未だ不安定な状況にあると言える。しかし、基本的に図書館学は図書館資料や図書館を中心に確立した学問であり、図書館情報学は図書館と情報を中心に行っている学問であると言えそうである。そして、「利用者」を重視するようになって情報学との緊張関係がより高まっている、とも言えそうである。さらには、情報技術の劇的な進展によって、新しい情報専門職も出現するし、図書館情報学と情報学が重なる部分がより多くなり、領域争いを行っているようにも思われる。

この論稿では4者（もしくは5者）の理解の仕方を見えてきたが、エスタブルークの「図書館情報学は、‘利用者中心’という特徴を持っている。情報メディアだけに焦点を当てるのではなく、それらに記録された知識（内容）を必要とする人々へアクセスおよび入手可能とするような社会的、技術的システムにも焦点を当てる」という表現がわかりやすく、図書館情報学の特徴（特に図書館学と比較して）を比較的鮮明にしていると思われる。

ヒオerlandは上記の文献の中で、図書館情報学は社会における知識生産に関する学問であり、その知識が如何にしてドキュメントに実現化されるか、また、様々なグループや個人に利用されるために如何にして知識は組織化され、ラベル化され、管理されるか、に関する学問であると論じている。そし

て、その目的は人々が必要とする、もしくは読みたい、もしくは経験したいと思っている図書、記事、絵画、音楽、その他の情報源を見つけるのを手助け<sup>54)</sup>することである、と論じている。ヒオランダのこの表現はさらにわかりやすく、説得力のある言説である。それは学問志向の図書館情報学ではなく、専門職を基盤にした図書館情報学である。図書館情報専門職（ライブラリアン職）が支持すべき図書館情報学の理解の仕方である。そのような図書館情報学が普及するためには、そのような図書館情報学を研究する研究者を多く輩出させる必要がある。そのためには図書館界からの強いバックアップが必要だと思われる。

## 註

- 1) 稚内北星学園大学情報メディア学部「図書館情報学課程」〈[http://www.wakuhok.ac.jp/tosyokan\\_johougaku\\_katei.html](http://www.wakuhok.ac.jp/tosyokan_johougaku_katei.html)〉（参照：2015-10-14）
- 2) 藤女子大学「図書館情報学課程」〈<https://www.fujijoshi.ac.jp/dept/program/clis/>〉（参照：2015-10-14）
- 3) 川崎千加 [ほか]「現在の図書館情報学教育に対する要請について考える」『桃山学院大学総合研究所紀要』、2010. 〈[http://www.andrew.ac.jp/soken/pdf\\_3-1/sokenk203-1.pdf](http://www.andrew.ac.jp/soken/pdf_3-1/sokenk203-1.pdf)〉（参照：2015-10-14）
- 4) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第4版、丸善、2013, p. 177.
- 5) L.S. Estabrook, "Library and Information Science": *Encyclopedia of Library and Information Sciences*. Editor-in-Chief : Marcia J. Bates. 3<sup>rd</sup>ed. (CPC Press, 2010.p. 3287-3292)
- 6) M.J. Bates, "The Information Professions: Knowledge, Memory, Heritage" *Information Research*. Vol. 20, no. 1, 2015, p. 1-16. 〈<http://www.informationr.net/ir/20-1/paper655.html#.Vk1fbYdUDIU>〉（参照：2015-10-14）
- 7) R. Audunson, "Library and Information Science Education - Discipline Profession, Vocation?" *Journal of Education for Library and Information*

- Science*. Vol. 48, no. 2, 2007, p. 94-107.
- 8) S. Myburgh & A.M. Tammamo, "Education for Digital Librarians: Some European Observations," *Library and Information Science Trends and Research: Europe* (Emerald Group Publishing, 2012, p. 217-45)
  - 9) C.C. Williamson, *Training for Library Service*. Carnegie Corporation of New York, 1923.
  - 10) B. Berelson, *The Library's Public: a Report of the Public Library Inquiry*. Columbia University Press, 1949.
  - 11) M. Eagan and J. Shera, "Foundations of a Theory of Bibliography," *Library Quarterly*. Vol. 22, No. 2, 1952, p. 125-37.
  - 12) V. Bush, "As We May Think," *Atlantic Monthly*. Vol. 176, No. 1, 1945, p. 101-08.
  - 13) C. Shannon. "A Mathematical Theory of Communication," *Bell System Technical Journal*. No. 27, 1948, p. 379-423 and 623-656.
  - 14) C. Shannon and W. Weaver. *A Mathematical Theory of Communication*. Univ. of Illinois Press, 1963. C.E. シャノン : W. ウィーヴァー著 : 長谷川淳 : 井上光洋訳. 『コミュニケーションの数学的理論』明治図書、1969.
  - 15) J.T. Klapper. *The Effects of the Mass Media*. Bureau of Applied Social Research of Columbia University, 1949.
  - 16) M. McLuhan. *The Gutenberg Galaxy*. University of Toronto Press, 1962. マーシャル・マクルーハン著 : 森常治訳 『ゲーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』みすず書房、1986.
  - 17) F. Machlup. *The Production and Distribution of Knowledge in the United States*. Princeton University Press, 1962.
  - 18) B. Dervin and M. Nilan. "Information needs and uses," *Annual Review of Information Science and Technology*. Vol. 21, 1986, p. 3-33.
  - 19) T.D. Wilson, "Models in information behaviour research," *Journal of Documentation*. Vol. 55, No. 3, 1999, p. 249-270.
  - 20) B. Dervin and C. Naumer, "Sense-Making," *Encyclopedia of Library and Information Sciences*. op. cit., p. 4696-4707.
  - 21) C. Kuhlthau, *Seeking Meaning: A Process Approach to Library and*

- Information Services*. 2<sup>nd</sup>ed. Libraries Unlimited, 2002.
- 22) B. Dervin and P. Dewdney. "Neutral Questioning: A New Approach to the Reference Interview", *Reference Quarterly*. Vol. 25, No. 4, 1986, p. 506-513.  
松林麻実子「Brenda Dervin による「意味付与アプローチ」の意義とその応用」*Library and Information Science*. No. 34, 1995, p. 1-15.
- 23) J. Durrance, et al., *Approaches for Understanding Community Information Use: a Framework for Identifying and Applying Knowledge of Information Behaviour in Public Libraries. Final Narrative Report to the Institute of Museum and Library Services*. University of Michigan and University of Washington, 2005.
- 24) J.-M. Griffiths and D.W. King. *A Strong Future for Public Library Use and Employment*. ALA, 2011.
- 25) A.D. Abbott. *The System of Professions*. University of Chicago Press, 1988.
- 26) M. Buckland, "Documentation, Information Science and Library Science in the USA," *Information Processing and Management*. Vol. 32, no. 1, 1996, p. 63-76.
- 27) B. Hjørland, "Information Science and Its Core Concepts: Levels of Disagreement," *Theories of Information, Communication and Knowledge; A Multidisciplinary Approach*, edited by F. Ibekwe-SanJuan & T.M. Dousa (Springer Netherlands, 2014, p. 205-35)
- 28) V. Larivière, C.R. Sugimoto & B. Cronin, "A Bibliometric Chronicling of Library and Information Science's First Hundred Years," *Journal of the American Society for Information Science and Technology*. Vol. 63, no. 5, 2012, p. 997-1016.
- 29) figure 2 "The information professions: knowledge, memory, heritage" <<http://www.informationr.net/ir/20-1/paper655.html#.VklhyYdUDIV>> (参照：2015-10-14)
- 30) figure 3 "The information professions: knowledge, memory, heritage" <<http://www.informationr.net/ir/20-1/paper655.html#.VklhyYdUDIV>> (参照：2015-10-14)
- 31) figure 4, figure 12, figure 13 "The information professions: knowledge,

- memory, heritage” 〈<http://www.informationr.net/ir/20-1/paper655.html#Vk1hyYdUDIV>〉 (参照：2015-10-14)
- 32) S. Goonatilake, *The Evolution of Information: Lineages in Gene, Culture and Artefact*. London: Pinter, 1991.
- 33) figure 8 “The information professions: knowledge, memory, heritage” 〈<http://www.informationr.net/ir/20-1/paper655.html#Vk1hyYdUDIV>〉 (参照：2015-10-14)
- 34) 上掲25)
- 35) G. Oliver, “Transcending Silos, Developing Synergies: Libraries and Archives,” *Information Research*. Vol. 15, no. 4, 2010. 〈<http://www.informationr.net/ir/15-4/colis716.html>〉 (参照：2015-11-24)
- 36) ボローニャ・プロセス計画の一環として、図書館情報学教育の領域では2005年に「ヨーロッパにおける図書館情報学教育カリキュラムに関する熟考」(European Curriculum Reflections on Library and Information Science Education) プロジェクトがある。その詳細に関しては次の文献を参照：中島幸子「ボローニャ・プロセスとヨーロッパの図書館情報学教育カリキュラム改革：『ヨーロッパの図書館情報学教育におけるカリキュラム像』を中心に」所収：京都図書館学研究会編・発行『図書館情報学教育論叢：岩猿敏生先生卒寿記念論文集』(2012, p. 119-42)
- 37) F. Astrom, “The Social and Intellectual. Development of Library and Information Science” 〈<http://www.diva-portal.org/smash/get/diva2:145144/FULLTEXT01>〉 (参照：2015-11-14)
- 38) R. Audunson & S. Aabo, “From Collections to Connections: Building a Revised Platform for Library and Information Science,” *Information Research*. Vol. 18, no. 3, 2013. 〈<http://www.informationr.net/ir/18-3/colis/paperC29.html#VkvF3IdUDIU>〉 (参照：2015-11-14)
- 39) 上掲8) p. 221.
- 40) A. M. Schrader, “The domain of information science: problems in conceptualization and in consensus-building,” *Information Services & Use*. Vol. 6, no. 5/6, p. 169-205.
- 41) C.E. Shannon & W. Weaver, *Mathematical Theory of Communication*. Univ.



- of Illinois Press, 1949.
- 42) Digital Library Federation, A Working Definition of Digital Library 1998. [〈http://old.diglib.org/about/dldefinition.htm〉](http://old.diglib.org/about/dldefinition.htm)（参照：2015-11-24）
- 43) R. Barthes, *Image-Music-Text*. Fontana Press, 1977.
- 44) R. Chartier, "Languages, Books, and Reading from the Printed Word to the Digital Text," *Critical Inquiry*. Vol. 31, 2004, p. 133-52.
- 45) J.H. Shera, "Librarianship and Information Science," 所収： *The Study of Information*, ed. by F. Machlup and U. Mansfield (Wiley, 1983, p. 379-88)
- 46) J.G.B. Prinsen, "A Challenging Future Awaits Libraries Able to Change," *D-Lib Magazine*. Vol. 7, no. 11, 2002. [〈http://www.dlib.org/dlib/november01/prinsen/11prinsen.html〉](http://www.dlib.org/dlib/november01/prinsen/11prinsen.html)（参照：2015-11-14）
- 47) L. Rausing, *Toward a New Alexandria*. 2010. [〈http://www.newrepublic.com/article/books-and-arts/toward-new-alexandria〉](http://www.newrepublic.com/article/books-and-arts/toward-new-alexandria)（参照：2015-11-14）
- 48) H. Kopetz, "A Conceptual Model for the Information Transfer in System of Systems," 17th IEEE Symposium on Object/Component/Service-oriented Real-time Distributed Computing (ISORC). 2014. [〈http://www.cpsos.eu/wp-content/uploads/2014/07/A-Conceptual-Model-for-the-Information-Transfer-in-SoS\\_06-2014\\_H-Kopetz.pdf〉](http://www.cpsos.eu/wp-content/uploads/2014/07/A-Conceptual-Model-for-the-Information-Transfer-in-SoS_06-2014_H-Kopetz.pdf)（参照：2015-11-14）
- 49) C. Zins, "Conceptual Approaches for Defining Data, Information, and Knowledge," *Journal of the American Society of Information Science and Technology*. Vol. 58, no. 4, 2007, p. 479-93.
- 50) R.C. Greer, "Information Transfer: A Conceptual Model for Librarianship, Information Science, and Information Management," *Great Plains Libraries*, 1982, p.3-10. [〈http://www.whataweb.com/li803/d\\_course\\_articles\\_greer1.pdf〉](http://www.whataweb.com/li803/d_course_articles_greer1.pdf)（参照：2015-11-14）
- 51) S. Pierce, "Dead. Germans and the Theory of Librarianship," *American Libraries*. Vol. 23, no. 8, 1992, p. 641-43.
- 52) M.J. Bates, "Information and Knowledge: an Evolutionary Framework for Information Science," *Information Research*. Vol. 10, no. 4, 2005. [〈http://www.informationr.net/ir/10-4/paper239.html〉](http://www.informationr.net/ir/10-4/paper239.html)（参照：2015-11-14）
- 53) S. Myburgh "Free at Last," *Trends, Discovery and People in the Digital*

58 欧米における図書館学と図書館情報学の概念 (山本・大城)

*Age*, edited by D. Baker and W. Evans (Chandos Publishing, 2013. p. 223-37)

54) 上掲27)

〈キーワード〉 ライブラリアン、メタディシプリン、デジタル人文学